

万葉歌のご紹介

あゆのかぜ

東風 いたく吹くらし

なご

あま

ふ

つり

をぶね

こ

かく

み

奈呉の海人の 釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ

大伴家持（巻十七・四〇一七）

東風がひどく吹いているらしい。奈呉の海人の釣りをしている小舟が、波の間を漕ぎ進むのが見え隠れしている。

たちやま

ふ

お

ゆき

立山に 降り置ける雪を

とこなつ

み

あ

かむ

常夏に 見れども飽かず 神からならし

大伴家持（巻十七・四〇〇二）

立山に降り積もった雪を夏の盛りに見ても見飽きることはない。神の山だからにちがいない。

万葉集

奈良時代末（七七〇～七八二）大伴家持がまとめた日本最古の歌集。天皇から名もなき人々の歌四五一六首が収められています。また、新元号の「令和」は、万葉集が出典となっています。

大伴家持

歌人。越中国守として五年間越中国（国府は現在の富山県高岡市）に在任。万葉集四五一六首の中には「越中万葉」と呼ばれる三三七首があり、そのうち家持の歌は二二三首を数える。六八才で没す。

あいの風
とやま鉄道
Ainokaze Toyama Railway

「東風（あゆのかぜ）」は「あいのかぜ」とも言われ、「あいの風とやま鉄道」の社名の由来となっています。



一万三千尺物語